防災教育学研究　1-(1):153-154,2020

速報

令和２年７月豪雨における被災状況
－熊本県球磨川流域を中心に－

田中綾子[1)]、柴田真裕[2)]、前林明日香[3)]、前林清和[4)]

1) 学術会員　関西国際大学経営学部経営学科、講師
2) 学術会員　桃山学院教育大学人間教育学部人間教育学科、助教
3) 学生会員　兵庫県立大学院減災復興政策研究科　修士課程
4) 学術会員　神戸学院大学現代社会学部社会防災学科　教授　博士（文学）

1. はじめに

2020 年 7 月上旬から中旬にかけて日本列島各地は豪雨による災害に見まわれた。特に熊本では大きな被害がでた。筆者らは、2020 年 7 月 25 日・26 日に熊本に入り、球磨川流域を中心に調査を実施した。

今回は、球磨川の氾濫による被害状況を主に調査した。その際、ドローンを使っての撮影を行ったことで、広範囲にわたる被災状況を把握することができた。また、人吉市の市街をはじめ調査した全ての被災地で、被災から 2 週間以上経っているにも関わらず泥かきなどの復旧作業が進んでいない状況を目の当たりにした。

2. 令和２年７月豪雨

2020 年 7 月 3 日から 9 日にかけて、梅雨前線が停滞し西日本から東日本にかけての広い範囲で大雨が降った。7 月 4 日には、大雨特別警報が熊本県、鹿児島県に出され、6 日には福岡県、佐賀県、長崎県に、8 日は岐阜県、長野県に出された。その後、7 月の終わりまで全国各地で大雨が続いた。特に、熊本県南部の人吉市と球磨村では記録的な降水量となり、球磨川やその支流において複数個所で氾濫が生じ、大きな被害がでた（図 1）。死者は、人吉市で 20 名、球磨村で 25 名にのぼった。（気象庁情報 8 月 4 日）

3. 球磨川流域被害状況

筆者らは、25 日に現地に入り、球磨川を河口のある八代市から車で上流に進んだ。しかし、両岸とも道路の崩壊で通行止めになっており、八代市坂本町付近までしか行けなかった。この地点で、深水橋が流失していた（写真 1）。

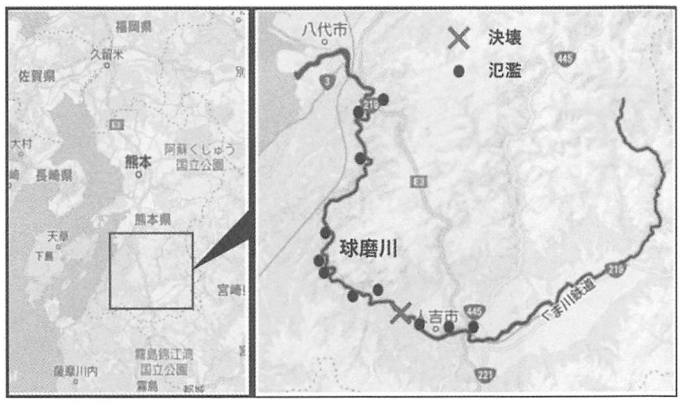

図１　球磨川の決壊と氾濫の位置

写真１　流失した深水橋（八代市坂本町）

写真 2　被災した人吉市の温泉旅館

写真 3　氾濫流で大破した家屋と線路（渡地区）

写真 4　上空から見た渡地区と相良橋

26 日は、八代市の避難所で炊き出しのボランティアを行っておられる本学会会員の柴田俊博氏より現地で情報を頂いたうえで、高速道路から人吉市に入った。

人吉市では、街の中心部にあたる温泉街が大きく被災しており、場所によっては 3m 以上浸水したようである（写真 2）。さらに、人吉市から球磨川沿いに下流に向かい、被害が最も大きかった球磨村の渡地区に入った。渡地区では 2 階建ての家の屋根以上の高さの浸水があり、屋根に多くの漂流物が乗っている状態であった。また、多くの家屋が氾濫流により破壊的な被害を受けており、家の基礎部分しか残っていない家屋も複数みられた。さらに、JR えびの高原線の第二球磨川橋梁が流失し、さらに自動車道路の相良橋も流失していた（写真 3・写真 4）。

4. 人吉市ボランティアセンターにて

人吉市（球磨村併設）災害ボランティアセンターを訪れ、本学会から持参した高圧洗浄機を寄贈した（写真 5）。

現地では、多くの家屋が泥と瓦礫で埋まった状態であった。ボランティアセンターには、資機材は比較的多くあった。しかし、コロナ禍によってボランティアを県内の人に限定しており、人手が全く足りていない状況が続いているとのことであった。

5. おわりに

球磨川流域の被害は甚大であり、視察した人吉市内や球磨村においては、多くの家屋が破壊されていた。決壊していない個所も、越水による激しい氾濫流にみまわれたことが推察できる。

被災地域の調査後、26 日に熊本市にある九州ルーテル学院大学の西章男先生に面談し、学生とのボランティア活動の状況について聞いた。県内の大学生でもコロナ禍のなか、ボランティアが思うようにできない状況であり、これからの復旧活動に不安が残るとのことであった。

写真 5　学会から高圧洗浄機を寄贈